823
.M8Ks

湖月抄

よもきふ

.20

Freer Gallery of Art
Washington, D. C

蓬生

并一　細　巻ノ名詞并ニ歌ともによもぎふとつゞけたる縮ハなき也よもぎふと云る詞にも歌にもみえたり

孟　詞にも只えわかさせたまはまじき蓬の露けさになん侍るとありよもぎとはいはれぬに依てよもぎふといふべく并よハ弱わきてもみえ侍れどもとハ道をもたくみたる蓬乃事のなをとりわり　河　此巻に蓬ノ字七あり　独ても蓬生とつゞけたりハなし　生此字ハ付字也やうまへ字をも付て云る此物語のならひ也　并蓬　姜浴橋のなごりひ也

細　兼名よハえわかさせたまふまじきこよもぎハかの露けさになんとあり　葎蓬の事也只但蓬の露けさとあるなり云こ

蓬生と云事　河　杜詩云　蓬生非無根云云　拾遺　いつてく露きつらん蓬生の人をうよぬまでやどの道　并此事　細　横の并也　澪標のさかりにもあり　源氏廿七歳より

7152

事八講（みをつくしの巻よあり）のことなりけり此八月の四月此丈と向ますすわ
至来ん結合の末まての事あり。末ハ望よなるゝ。悉皆
常陸宮の姫君とゝおなし。花 源氏廿七八才のことみえたり
さんなかし蓬生の君の姫君を出家（卒すへ）よまちてども
めハ源氏の須磨へうつりなって。御京の事をとゝこ。姫よハ又一とせ
ばかりつゝ年をへたるなって二条の東乃院よううりなったまひ
とのせうり。これ花散里の院をいれ出来そへうるうちへ事ゝに八ま
さしく蓬生の宿を訪ふて末摘花をうしなふ源氏廿八才の四
月乃ことゝ見を以く横の弁ふかしわ之 師 細 弁 横望之の
弁也とのまへり。花 孟よハ横の弁ことゝ云

かされつく 細 源氏の須磨の弁
とい源氏の須磨の身の近の
ものるとを出るゝ六十六条乃
事なり出り。河古の年以
いらへりとかへかへハ源
の国よりしられてまふ
とゝろへよ 孟日
さても我身のかり所
細 えんかくの住ゝへ姫を云之
孟 さて好色のゝへかりに
てものとどころあり人ゝ
ハ須磨よりのかへりを
一とぢよ見ひめつく源ハ
かりをさめのとうへゝち
ハさ海しよ此門ありけるえ
二条のうへをと 孟 是も源
かりと我いつりゝ今れ
とし御望自由なれハ細く海
なへ赤位あり。別居成之
かの浦もそひも
旅の物家事くありそめ式を
之御官位とゝろれうへ
の物家事之
ふけのこ成よ 細 只此世のう

かゝられつ。見びのひし比御ひ歎かしを
さ海くわびしかりけく人みはすらしとすて
色我身のかり所あらは、ひとえこの独すひ
こそうれしけれ。二条の人（紫上）へはどを
のどやかなりぞしびのはれもえ絶えわびつゝ
おもしろくわしうよひさひ川、位なさり（御の涂名はかすかなし）
まゝるうりのれもそひなもしけのこれよ
のうきめしを。時くよつけてあつかひさうこと（おくみえかたひてさすむぎ）
給よすぐさめ給えんおすかくそのうとくを
人みなえうしかれど。立別れひし程の涙（えおかり）
指をよそのこと、よそひわり給人この。
あさのうらくくてき給へりそひ（人こそれぬ思へ）

こよしといひて竹のとしをさくらせ乎くゝ面白し古今ノ序むかれ木の忘れぬくとしくなり
てをやいへるにや細くさんなく後ゝ御世ゝ時ハ高き宮上といへる也 孟 今ましに何も世のなかりん
竹のよれりとをかしきにさせとハ志しくもや 師 引歌よをもしさまりや
よるくそのかきし 細 源の世をふかの多世 師 源のおひへのかどもよりぞ人ヘて人の志いへきを
わらぬなり
立まされあひし程の 家の上手どのすゑの列の歎きをもそにもひやりしれどのかくく
ひさらの事 細 たちより末摘
のうちやまつむの書よみて
より宰上の何ども八末
摘のうすをいへんと 先こ
人ヽのうたども
いそしきれいさかひ
血いさくりなりけれどもつま
と産生の方ようりめしぞ
るすよりひあつて
天元の星の光と 細 李弦
よ及びれ唯源の清方よ
思いけてうなり待たれば
給ひけ給ふこのふ八層と
源さんく大元たん大海り
源へて見るもえいてくうなる
うらいのれよらて見る
も天のふとうしる九八品八一之足
いふらく 明 李弦云りかし

しらのえ乃君ハらしもみこのうを給ひし名
おはみなひあつかふ人りみすさはずえてはと
じうころ但そげたりしと 源のかうひそうひとるえ 方へうけぬ御こ
とのいつくこそてよふうひおとしおかしこうえ
ざりしどいうめしきこれ源の末摘とそく いきひよてそこ
とみもあらしそうるすき程どの御ある えびてみむ花か見えず けん
うらとめずしるもうど 末摘のさかもまゐ之 まうけ給はれ
うきとのきはさかは大堂の何しのひうり
ひどうしいのなようけしさらしてむしく

源七夕まつりよくしあの水
と庭上よきさて星わかの
かげどうしてうら手くこ
おうされうりわらかく
細 やうりなくの何雨しまい
まよ琵あふそていきさる
るへし何らとをあつうれ
見えさうし
ゆかしく神仏の 細 源の交
給ふと神仏のやうにをひし
ともし也 明 箋 よ風志うの
利堂のありこれ縁といふへ
ゆ但こうこの世のうしくはいひ
みうし
細 源氏の在俗のうちしさハ
悲別のうかられどもえんの
むしこうさきれ身なれハ一
身のうへのやうなりとそへ

しを給しきよう世のさはぎいそてさらくなる 細 源丁の在俗のすゞへ 源の
てのかうくゆかしきかれしまうれよいどうと 世 憂
わしらぬうちのんざしいうらわきれさうやう
みくどどくおそてましかし後ふりうえて 地で八部り おとこし八都ありとゝえ
もえしざるすてし給えとれその名残よ悲げし 細 源の末仏身 るかう之
はすくくをしるし給ひしとそし月かりましよあ 末摘のく
られはさびしきはありさ面なうひふうり女 末摘の在居生之
ひうさはいそやいとうちかしさはもくせよ 孟 蓬生の法 花の初之
まうりゆかしくて神仏のあはうれまつりん
やうなりし給ふべくよりうきとうとひとお
いづくゆそすうりのかりなうとありかくう
とまうしときゆほうとのこうれしといひなつう

さるかたにありつきたりし
細 父宮よりそれ迄ハ猶之
明 ひとへにさま住なれたる
ところなるべし

なか〳〵すこしよづきて
細 中比は源のかくし給ひし故に
中程にてみやうくさひしく
思しき事也 師 源の御めぐみ
ありし程はよろしくせしの〔ゆめ〕
こそ〔思〕ひなし〔つる〕後の〔ち〕
源の御恵にてえられたるべけれ
くちおしき〔次第〕のありさま
堪ことなるべし

すこしもさてありぬべき
細 源のかくひき給ひしは〔うち〕
らひしんでもありや〔よ〕
あるべし

ふくろふのこゑ 細 梟鳴
松桂枝狐蔵蘭菊叢と
いふ詩もあはれなりとぞ
云々 又 師 此詩ハ文
集凶宅ノ詩也 凶宅ハアレタル〔家〕
松桂蘭菊の奥に〔て〕おそろしき〔に〕
も荒れたる〔所〕の〔住〕

まして松のひゞきこぶかくきこえて〔けしき〕
しくれとつぶやきあはげくさうさとはなり
つきたりしあなたのとしごろは、いふかひな
きさびしさにめなれてすぐし給ふを、
なか〳〵すこしよづきてならひにける年月に、
いとたへがたくおもひなげくべし。すこしもさ
てありぬべき人〴〵は、おのづからまゐりつきて
ありしを、みなつぎ〳〵にしたがひてゆきちり
ぬ。女ばらのいのちたへぬもありて、月日に
したがひてかみしもの人かずすくな
くなりゆく。もとよりあれたりし宮のう
ちいとゞきつねのすみかになりて、うと

とかく此所は〔ゆかり〕〔illegible〕
こだま 細 樹神也 されど〔illegible〕
形をあらはしとぞ
孟人などに狐こだまな〔ど〕
ど徘徊すべし

まれ〳〵のこりてさぶらふ
今わびしくて〔illegible〕
細 みなのこりてある人の
ことばなりとの人のいへる
さき

はなちたまはせてんや
細 放ちやり給へかしといふ也
受領御家を買取るべき
由也 師 受領共に姫をば〔illegible〕
末の末なる物さとしたなれ〔illegible〕
の人などもかしづく

ほとりにつきて あないしの
〔illegible〕
あやうにとせさせたまひて
〔illegible〕住居

ましうけどほきこだちに、ふくろふのこゑ
を朝夕にみゝならしつゝ、人げにこそさや
うのものもせかれてかげかくしけれ、こ
霊などけしからぬ物どもところをえてやう〳〵
かたちをあらはし、物わびしきことのみかずし
らぬに、まれ〳〵のこりてさぶらふ人は、なほ
いとわりなし。このずりやうどものおも
しろき家づくりこのむが、この宮のこだちを心
につけて、はなちたまはせてんやと、ほと
りにつきて、あないしまうさするを、さや
うにせさせたまひて、いとかうものおそろし
からぬ御すまひに、おぼしうつろはなん。

すれハ武田殿をさそうよ
ゑらちのひてとえ桜い
とまりさのしとう細こへ
つけてこんらべし
せやの御親とまりうろくら
もううとさすこうとせまは
論語 在道而事人何必去
父母之邦
の都よ源氏物語 書経 孝子
し 盡 孝経 そのん出やのすこと
のみし不とが出ましとうそ
あまひのへゆへ志らんと
細 御飯の中茶の也乃
孝悌よりと。ぞて郷ろ人
をおつ也。御飯をも物の
よまどうりのなおのまゝを
うせよへるをさゝ給ろ
人の所望すると 御故わ
かな古人のおどうらおん
とあるへし
さん物えうして
花開わり御さやの
ともさこ用ひてとし

いろとまりさうふ婦人も。いとしうへかう
なども由れども。おゐかいろじやひとのさうども
ちんこともおりにけさうよ志つちうらりな
きまさてはいつくきんぐく御そろしけよあれ
あそぬれども。御やのはけとまりさうくら
もろふつきさもさこうとよおすくさえてこそ
あれどもうちあききつ御ゆ得しもりけども
でうども花も。いとうくへよあれくらく着や
うゐくうりし三線のまゝ物のゆへ志らんと
ゐ婦人さうりのえてうじてまさしとそのへ
のへんよをさせまへるとつ郡ゐさうて御自画
もうも。どのづしらうまうしさあわうりと

そころハ 細 まれしそ之
師よりは出られて謂なる
どうろハ上のつ又のるのを
之欲究今日新餞鑚
泣貴先湖旧賜第朗詠
引するハあつもそ
みりとおひおひくさこ
細 在家も視分にみうし
出かりくこして志をうせ給
ひつへんとく
うつくしきへの
細 宗廟之器不鬻於市
のうへ 盡 又宮のあるへ
まへ福ともをかくの家れう
ざうくなしてつとく
せんしの君
盡 醍醐の師
関禅子也 住摩物さうりよ
山しるのせんじのをこせそ
しります

おひゐなづうて。いひらうと。きいの女ださこう
いでをとん。ぞこそはよのつゐのくしとそ
とらまなこうつて。ゐよちうきそふわを
のとるつしき線。何くらさんとすら何よある
と。いろじうつゐまて。さよりしもひおそこ
そ志をとりを給けめ。さましうかろくしき
人の家のうざうとはなさんなさくへの比
用いさうんが。象かろこしくのくまひて
さうわさはをさせ給ひとつるるさこしくそ
もとふうひ学ゆる人ハなるさ比君也。とて
流をつとの禅師の左神ぞ。すれハ家
よかのよ時いさしのそさまへで。それとよ

あれしきわりしと
細河兎より子来法師と
うち此語祖齒書聞しき
法師とし〳〵しとて聞
法師の中よりて子らく
暗孟日
きげきくさまりぎと
細 掃除ちずともとせんともし
ほうぬるとえ此以下貧家の
あれさる故あるく〳〵とう
なれ
むかしハみし法んりのを
りどを　孟 八重葎して門
させりくへの奇のらく葎
が門をとらうかハ人のよ
りぬるすれどよのり統を
ふれども有りめくり好き
抄 掃花なるへしと枝物ちう
ちてへの心をわけさつい
ちのうかれを古今ま順乃
ふれきりと貫之かなう
八月のまろき　孟 源次あ
時分統 抄 その年そ
まあらへし

まるきみりめきこゝんすそ抄あれじきゝ得りし
ともの中あるもにうぎさちすく此世をまろまれきた
聖まりのしあそきけりきらきことしぎ紙
ざまりきりしりん物たやうち絡つすゝく
あまりくふわきちい庵の拙りくえてんきげ
まりもぎそえ新とわしきひて拙ひのほう
むかしハみしゑんりのこうどもしらこあ
さらぞよのりされど、ふかれどもやすめく
かの頃とるうしなどのみてすしらうみち
もそ善家よみすれバちかなりよわげすき
のらさんぞ先ざ海しき、八月拙わきゝあく
かりしとしらくどりしくられみしてちもの

ひさかろん　そのてさ
そりうすしひさそう
よ情うまさんてし
細 不羽也　は 不要
世曉 賊 貧家とうらくす
とりふんりまう
つくまよくいつさ
紀 東坡か詩よ貧家謙
掃地貧女常と
まもせ人なすもあつくまえて
うつむきてらく
すくろまことよすれさうけ
さ陰とそするそ
孟ちりまハうろりしさのまる
れなりして住まりかされ

やどとのちろちつさつゝすつきたかりしあで
はれのものこまげるまのうちて立ともまる
げきぞつまなりしぐふりさえて家よいぞじ
きうし相りり、ぬるてへるまでつみひさあう
ふあうりのも、拙りひやつまのさびしきれど
みや、此文をとさじふあうのりはなあます
ぶそようこぶりされだくいつまし
野 等 藪
ゆうしやぶるれども、子すぶらんでん乃
内げりうハおうしれきろうひろう九河
やくまうハいちさきなでもち人がありちら
いつまれどもと、まかうつしこしまちきこうつし
きされもちかなしそておりしくろし絡きされ

ぶら神へおや恋ハつゝれどくさき
めなどさづけて古抄(細)

わざとこのましかゝねと　細　女どち
細 態とこのましきうまぞ
ハまけ見どしも見えつるまの
わざく
のふみのいへ給ふとくぎやう
のうすどもうらうらめす
のよしぞ文字の故郷を
しまよ能隠とくりな
もうとくえくして侍
ますく天然上臈したさ
御く 暁 男方の文のうた
ハ桃さ女どら北書経を
もつましくし給へ

さるうへに物がたりなどやうのものをさへひゞ
古今
しみてこそつれづれともまぎらはしつゝ
なすまねびもやすくとむねをかきみだるなめれ
さあらのこともあるこころどもそくものし給
わざとこのましうねどとのびしうきまさ
いとぐるしうるきほどはおぼさじらうたからう
みそかよろしきかどもあらうしてもそわりつさ
人は本意ようけてをいとをさなげさ読へすべ
それどおやのりそうしづき給しけんとてさ
てのましよ世中をつましう物に扱ひして
まれなることかのひまつきたれおそりいせど
さらはなれ給ひど、めづらさきうしけ

かくかゝりつらやのとじ
河 唐守藐姑射刀自楚爽
姫いつまもかうさりのさら
の名く　細 何ま自も古物語た
こどしと、今もし内外和字で
又物語の事よかつふ女
をだ刀自しえ女の趣ぬ
なし
かうきとても　細 古今寄
家あまどうへ西由さす
ともあらおぼえ給ふ操
集るどしてそ不をもか
でさしや
うへやごく　河 紙屋紙陸奥紙
奥向より檀紙ともさきで
しらく檀をまゆとの事之
方紙は八ことのくはのとの
紙とかう紙屋河とい雅
平安の中と南へるかれう
川く仁和寺川とも号をさ
此れそて紙をもて紙など
今の世の人のをかう語らて
暁此称上臈し此く
もくすごとうしせ　細 花園丸

あけそむるころやのとびらくやび
めの物語の名をよくきゝとぞ侍るべくの
河 艶 一本ハタル所
ますぐらりのかし給ふこうさとそもかうし
さやうにえらびて読も読人をもわる
りんふらこそえぞしろとあらかれたら
とられむやうに、みちのくよかきなどの
みくさあらよふろこしくとものめあれよき
なりはいとをさ侮じげなるやさをめてなき
め給ひしくいいさひろげさるやいまゝよ
の人々をあつ給ひらよそ、よこをひなど
いふこといへとなうしく志あそこ紀の人
もなかれどもとなど紀よき給ひずらや

大臣有仁公也八條殿といふ

ありふれまし権亮まて經陀

羅尼の教をとらせたまふ

ときにひまあらし斎院

細 是ハ選子内親王にてまし

斎院也 細 式部卿宮とも

申し師貞親王の御時

斎院にまゐらせよし

大臣

ぞうしやうの北の方 細 妹なり

大貳の妻也 受領の北の方也母

方のをばなり 薬園の事

らうさわがしき人もなけ

ればなり 細 いまだうせぬ

中く根侍従ゆかしければ

れど受領の北の方ハ通ひし絡

なりし 抄 受領の北の方の宗

よしある女房なれど受

領の北の方のやうなるを

くもやもくて侍従がゆき

かよひし所なり

とのゐはしめまで

細 式部卿宮の御むすめに

侍従のめのと也の書なり

よろつくしくぞありし。侍従など（細 是ニ侍従といふ女房の母をいふ）いひ

し御めのとごのみこそ、としごろあくがれ

はてぬものにてさぶらひつれど、かよひま

ゐりし斎院うせ給ひなどして、いとたへがたく

心ぼそきに、この姫君の母北の方のはら（末つむの母）

からよにおちぶれて受領の北の方になり

給へるありけり。（細 大貳の北の方なり）むすめどもかしづきて、よろ

しきわか人どもも、むげにしらぬ所よりは

おやどもまうでかよひしをと思ひて、ときどき（侍従が母なく）

かよふ。この姫君は、かく人うときくせなれば、

むつましくもいひかよひ給はず。おのれをば

おとしめ給ひて、おもてぶせにおぼしたりし

さらなることいふべくもなし

給とも

もとよりありつきたるさやう

のなみなみの人ハなかなかよき

人のまねに

細 受領の北の方先世宿世にて受

領の妻となりたるなり

受領の北の方のまつりごとを

いへり 是より受領の北の方の

事をいへるなり

など人のおもふ人のことを見

り 宇治院などにもいらぬ人の

書などにハめでたく思ひあがり

上臈しき事をのみいふを

びんなきものにおもへるなり

みやこにしたがひてまうでたる

人なれどもおちぶれぬべき

宿世にや受領の妻となりしを

ぬすびとのやうにいひなしたる

受領の北の方のいひたることば

かくいひて 細 此事猶のことばハ

天性なやうにおちぶれて

受領の北の方になりてかう

べき世のすゑなる人のことく

かば、姫君の御ありさまの心ぐるしげなるも、

えとぶらひきこえずなど、なまくねく

ねしきことばども（受領の北方侍従にいひきこゆる也）いひきこえしらせつゝ、時々きこえ

けり。もとよりありつきたるさやうのなみなみ

の人は、なかなかよき人のまねに心をつくろ

ひおもひあがるも（しイ）おほかるを、やむごとなきす

ぢながらも、かうまでおつべきすくせありけ

ればにや、心すこしなほなほしきを（受領の北方の心）ばにぞあり

ける。わがかくおとりのさまにて、あなづらはしく

おもはれたりしを、いかで、かかるよのすゑに、

この君を、わがむすめどものつかひ人に

なしてしがな。

いかでかゝる世の末に思ひ
こゝろばせなどのふるびたる
細 ひめ君の事をいへり
ときく事に従ふせ給そ
明 叔母のよりの心にまかせ
おとしめたまへるにより
あれとなり
いひもよほせど
細 あながちにこそいはめ
はるけきとこのつゝみ
給ひてむつびたまはぬを
ねたしとなむ
細 家あるじ大弐
細 末摘の北の方の男
にて大弐に成たり
この君をなほもいざなはん
末摘の今あるさまを見て
くちをしくおもふなり

こゝろばせなどのふるびたるかたこそあれ
いとうしろやすきうしろみならんと思
ひて時々こゝにわたらせ給ひて御ことの
ねもうけ給はらまほしがる人なん侍ると
きこえけりこの侍従も常にいひもよほ
せど人にいどむ心にはあらでたゞこち
たき御ものづゝみなればさもむつびたまはぬ
をねたしとなむ思ひけるかゝるほどにかの
家あるじ大弐になりぬむすめどもあるべき
さまに見おきてくだりなんとすこの
君をなほもいざなはんの心ふかくて

とゞまりかへりなんとうけひきたまはねば
細 大弐の妻乃うへと大弐
まかりくだる事 宰府へ下
なりて下りぬる也
ちかきたのみ
うけひき
細 宮の御家にてありしまゝ
べきにはあらずとひき
給はざる也
大将殿 河 源氏遷任大将
事不見 但 児女房をおどし
目ざましくいへる也
ゆへに大将殿と
いはれども只源の事に称す
されば後の詞にあるべし
あさとわり 細
ゑんじうけひけり うけ
ねと涙の嗚咽にして 河 怨う
あひやしく歎詞也
さる程にげに世の中に 細 如此

はるかにかくまかりなんとするに心ほそき
御ありさまの常にしもとぶらひきこえ
ねど近きたのみ侍りつるほどこそあれい
とあはれにうしろめたくなんなどこと
よがるをさらにうけひき給はねばあな
にくことことしや心ひとつに思しあがる
ともさるやぶはらに年へたまふ人を
大将殿もやむごとなくしも思ひきこえ
給はじなどゑんじうけひけりさるほどに
げに世の中にゆるされ給ひて都にかへり
給ふと天の下のよろこびにてたちさはぐ
われもいかで人よりさきにふかき心ざしを

かゝらぬは源語の詞也
覧などゝいふをのみごとく
のゝしり
へなうしにあつかはしく猶は
細 此まぎれは此文などに
の意はおもひわすれぬるも
なすことゝせり
今はかぎりなりけり
細 此ほどの文のうきさ倫
のなし 孟 源語意多きをと
もえいづる春にあひ給はなんと
かくいふなるは
[illegible]
まれなる[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
とせ也
たびしかはらなどまで
細 [illegible]
しかし[illegible]
[illegible] 孟

ざしを御らんぜられんとのみおもひきほふおとこ
女につけて、たかきをもくだれるをも、人
の心ばへを見給ふに、哀におぼししるゝ事
さまぐ也。かやうにあはたゞしきほど
に、さらにおもひいで給ふけしき見えで月日へぬ。
いまはかぎりなりけり。年比あらぬさまなる
御さまを、かなしういみじき事をおもひながら
も、もえいづる春にあひ給はなんと念じ
わたりつれど。たびしかはらなどまでよろこ
び思ふなる御位あらたまりなどする
をよそにのみきくべきなりけり。
かなしかりしをりのうれはしさは、たゞ我身

ひとつのためになれるとおぼえし、かひ
なき世かなと、心くだけてつらくかなし
ければ、人しれずねをのみなき給ふ。大弐の北
の方、さればよ、まさにかくたづきなく人
わろき御有さまを、かずまへ給ふ人はあり
なんや。仏ひじりも、つみかろきをこそみ
ちびきよくし給ふなれ。かゝる御ありさ
まにて、たけく世をおぼし、宮上などのおはせし
時のまゝにならひ給へる御心おご
りの、いとほしき事と、いとゞをこがましげ
に思ひて、なほおぼしたちね。世のうき時
は見えぬ山路をこそはたづぬなれ。ゐ

神さびたる[illegible] 細
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
大弐の北方
[illegible] 細 宮
[illegible] 孟 伯母の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
仏ひじりも 細 法華経に
如是人難度といへり
方便[illegible]
[illegible] 孟 源氏
末摘の[illegible]
[illegible]
世のうき時は 河 古
[illegible] 世の
[illegible]
古[illegible]

も卯世のうき河のうく風家
まさん孟世のうき河ハみて
ね山へも入まどうくしハ
此下向あれとのんと
ゆげなうしまたう
孟ろし八雁之かの方のやうう
まなりりまへし女房衣の
やく

くまりおよ
岩ひとうしん龍紫へさ
まて末摘と給よみなまり
もそんをあらうしとそ
いぎすひきをゆかし
えぽりとうん
りくいうきうの姫君とみ
とうそ龍紫へゆんうハ
うしことも

中るどいむつしき猫しゆかしゆうくめど。
（孟一向まし語らく八まじくもや）ひらうつよ人へもうけよいすもえてあしき
こしるどいとことうくいへでむしげよく
おくらう おいくさもうひき給ひあんへまけきさ（孟今のおもて）
（らハしきもすハあたしとし）ことをしあつまりきこれ男をいつよゆかしてつ
くらそしうりれうろうすらんとりどきつふ
やく御後とのおさ武のとへうひ、くう（細 大武のとひの事よ語れり）
ひつきそどうむへうとあくぶうそれべしよ
まあなよいどくゝちそ、こまらうそんゆう、て、
るつうしきいでそくのうときふれどか
給くうけるれてひさしうよのり給おう（細 陳よふかくどろけまうし）
人よこのきどうけ給ほうろの内よおり（末摘のくるまし）

親男のくてりく忘られ
しう 細 末摘の男れうき
果孫つそ忘しまぬる
と翁しあふく源をえ
うしく給ハどうく性
ふく行まの要しされ
うや
ありしまりあまよ
抄 家系などの義うこ
そろ苦もるきさうされ
洞後なさとをへうしうひ
みうとあく
こ山人のあうきこうのと
抄 給くあれども只鼻
とハ方すべし誰孫まこ
とよりてハそり孟是ハ公
ぬうくさまるすれど末摘
の鼻の赤きりと祖云に
末実一をうりよあそた
うやうかく出るりおね
るうさがうなうゆへよ鼻

ときありへてもゆかしいづかたであら
じやハ義よとうろぶつき琴を志給しよ。
親男のうちそてく忘られよりてあれ。
風のつてまでも袱りくいどじきまう猿を愛
つけ給なぐうすしびとふくひいで給てん
とぞしろ巣しられバ大りさの御家るも。
ありしうけよあさゆしられど、まうこ（茅やうし）
あうりそてしうすきこれでうしなるどもと
まさしるのせ給ひをんつうくゆかしき海
まそ孫んしをうし給如くう、わるきが（末摘のさわし）
うよいとく巣しきて、うういさぐ山へ人蒸
あうきこのミひと河を、わよてさするあ

もいよ〳〵おもくなりゆく
ねがろげの人への心なりゆ
あすづきみもあしれ
ろ方の人への心をもえべき
みもおしぬかく源氏の
性のもられさまよりそ
うらんへども思て表と
ねおは立りへし
この御は古院の御れうの
細 澪標の巻にまさし八講
なり。同行あるべし。十月
仲のことし源の廿七歳之
ころとんしのこゝみ
細 ひとこの心れはまのろ
あかりなりおば禅師ノ
君も世にすぐれたる
とこさ僧常りみより
かめしき窓とかへりみに
あろく権大納言
御是より源氏の禅
のおりさ僧と禅師の
くりまりあし

ところにほうしなどはなべての人 細 羽褒之
のこまりゆるえべきみもあらじざえ
しくはのしいとおこなひにしみ
さやうなり。御よなりゆく。まじらひいかしく
細 みちのきさつひ給くなりけるつかうまつりてもすこ 常陸の宮の御せうと
しあのとれみはほ院の御さあよ法八 源氏の御方へ
禅世師ゆきもりてし給へるよそうか 行よんとおもふ 侍
はなべてのはめされざえすぐれたるひ
よしときかぎりをえらせ給ひければ
このぜんじのきみもまゐり給へりけり
さ海よたちよりまてしかしか 末摘の方へ 禅師の詞 源氏也
のはち八かうにまゐりて侍るなり。いとかう 権大納言殿

いけろ浄土 五生仏国土也
かざりかさり
五源もこゝ人まて八こう
と醍醐の禅師の詞也
いつゝのみこゝり
細 源のおするゝ大濁の世
よ生れ給て大特なる
ふしぎもとくらりなる網
かけり 法 五濁 劫濁 見
濁 煩悩ー 衆生ー 命
ー
仏この仏ぼさけり
細 仏ぼさけ也しき仏也
きゝとまず 御語から記
とくし五世をもつてみへ入よ
をともそられさうと末
摘のうらみ也なり
おもりよくりあかり
細 みつるくとひわそて
常よ今ハゐきりゐりなり
く末摘のくさ海よひ
しおらあてたまとぞり

うるいけ浄土のかざりにおとらずいかう
めしうおもしろきことのかぎりをなん
しまへる仏菩薩のへんげの身にこそ 変化 源氏をさしてのたまふ
ものし給めれいつゝのにごりふかき世になど
てむまれ給ひけんといひてやがていで給
ひぬ。ことずくなにて世の人ににぬ御あはひ 兄弟の中をいふ
にてかひなきすさびごとをだにきこえあはせ
給はずさても、かばかりつたなき身のありさまを 末摘の心
あはれにおぼつかなくてすぐし給ふは心うの
仏菩薩やとつらうおぼゆるを げに
かぎりなめりとやう〳〵思ひなり給ふに大
弐の北の方にはかにきたり。

礼記内則適子庶子祇事宗子宗婦雖貴富不敢以貴富入宗子之家雖衆車徒舎於外以寡約入不敢以貴富加於父兄宗族

[illegible]

河蔣詡字元卿舎中竹下開三徑 文選曰三徑就荒

陶淵明 三徑 [illegible]

[illegible]

あさきもたべきやうも葉よ
地よりく
とりどころもなきは
孟 何かは隣器にふくんと
なり 孟 大将は今辞し
大将どの 晴日
されども女などはいひつかう
ところぐに云之
世の中のくさぐさめもあり
されば
抄 源氏のうへひきあひし
てまぐれなる附まくせ
うみし云つれどそれも
中さへてりくさびしさ
さ海に母なれは外とい
ひとく也く中くれつまの
身ハわらやそこさと時に
おひさうまでにん母より
してまた播と雨ざむき嘲
母なくうしくなく

かゝる海にはしてかぐらもなくべきぞかし。
夫の大弐になりて行をありうくく
されどゆくさきをらんとやりて、いとくらよ
大弐 小式部 細 後身を語るとなりて云く
あやしう数多おいたもしられ。その外なべ地も
未ぬもくるしみありみあり
てみをあけりと思しまそしうりしうびうと
くしきやうにかわりそめにめしりど。びりしご
末摘の之
ろもなるよりやむごとなきに海にさ母わり
孟子
あしう大将殿などはあらしあらじとある
源氏之 末摘の之
くるの程などりうしげなくえまれし
うべなるん。むつびらくしさらくもたでうとうと
大弐の北の方は気執しまへも思ゆかむき
母なくてもそれ給つる世中のうく
めでなりかれいりでなかぬ身ハ世もなく
いやもしくゆらりのなりけりとびろのく

さは伯母といふるによりくう
なり
いとうれしきなりけれど
師 大弐 小方のうくさる
まらるんとされいくろ
めて給よみて 末摘と全
旅行 常 いさきひとつの
物ともおきに ゆうくしるなこ
ごらんまふ 但て
世よ似ぬさ思ひて何ぐん
世の人ハ 似ぬ我々ある
あらき海なりくるよ々は
いづへもゆりんとのこて
なり
げよ多きなん 抄 又伯母少弐
細之 我はきやうに 大式 土もわ
されどとくなき 邪表 と 堪
思ひしものいまれへとさ
見もいざなりんのかなそ
いりふ身をもとて
孟 身を見てかやうの事
まなとひりのそし

まありし時まで海ののとくれしくんぞう
細 末摘にありけり
しくやどらかさ程ハそのさうしきとし給
母りものくうるよりくらくすん給のど。
くちらうみまからなんとちれいさしうぬ
まく義よ母かて給ぬじくるへやぶんふば
細 末之
てもいくん給つぞ。いとうれしさしきすれ
細 末の身之
ど。世よみぬき海みくなるよりなうるみ
細 大弐の北の方之
こそかはしさおしろんぞ絡としりくぞ
まんへ。げに思ひなんいかに思ひさん
荒て母をかうして復様し
身もともそくしくつけ時給ゑさる
源氏之
うびひて仰しもやあしん大将殿の御く
てくどき給りんよいしてハひさうへき海のう

吉祥天女の御事也
細 吉祥天女 孟 式アヤとあり
吉祥天女ハ乞女ニ式ア
マよハ此ミるし

やぶちらく 鞮 ハラトヨム
リラ二八非ス 細孟同
うらぎらめく
細 まことの貞女ととを別し
て云侍るよしとぞ 孟 真
実の貞女にて偏ニ私なくて
妙にしてかくもとし給の
心すみすまじきとなし

てすなほならんくゝあとはゝあめりらう(是も嘲哢の詞也)
は侍れど、ここではきみはひとりの御ありさまをもしも
をあつかひけるまゝうらつゝけ給ふこともな(源氏のこと)
ノりそり、むりしらすぎくし二これん(源のことをいふ)
しそ、すべざらまうすひ侍りける所にこそおれ
けがしらすればさうしてらうら(まき絹のうらぐく)ものを
うまさき海にそ。やぶはらしよそうしまん(藪原)
すべんをバうろかざうか衣とさのるあつる
あらぬ海とも、あのへの給しいもしうろく(おね)
かんめへきるめしいひ志くれすうとげ、ま(細 式の事なり)
と御ずもいとうなしそてつかゞこと(おま様の言ひちらべきこと也めし)
すさまふさんどうつへもあかくねぶ。

しやう細みめ
ぎゝたくの侍よりうらゝる
きめてそうらづうふを
よし
あろうそく給ふ
細 御侍まうるまかせてまの書
の中に又文の乃侍も何
事も理りろうとく 孟 侍
侍り中ゆそ批判して下
詞く
きうみ中さへ皆ゆづきこうれ
衣も 孟 川おぬをつろハされ
うく世がしめせども何も
うけ也にうし 師手様の礼
とつまる数米ろりしへく
侍侍よとゝせくく世が
せどゝ可被もろきとう
ろく御川前もあるべし
年へゆうまうこと世侍だき
侍侍が久しくつるとしまう
しとて世ん空かさし

しろ河よりひとつ〳〵ひきてされば(伯母博士のこと)
侍ほをぶみし日の事ちよくにひそげぞ。
うろあはさしくそおするうばなる河(孟 ろ)
さふうつを孜へのふをとうぞらぬまうで
侍らんうのきとて侍もこといろやりちき(かしこのこと)
ぼかりふもつゝふもさうくゝの侍れどさう(まき様の事)
まるのふあもんうしくすんと思ひぞ
そこれば。ばんてへりもそくしとすうとう(細 侍従さん取を折節てけと見がとこ)
らあしうこもあうれかも好がらど。ぶびとく
むべきうとはくて。いとじねとのそゝけ
きうとめそくりの侍。うさうへてすそくへまべき(男まされなふ表ものく多うちこく)
ことされでらうりてき日すれ侍されがとうくへぬる

九文人よりうり　細　九文人ハおもり
ぐらりと後く昔ハ二条の
すけ九文くくぐれハぐら
をも九文人よすうく　師　末摘
花のことのみがきすゝ末摘
花の季よをもあり
ひとつのくのえかう　細　薫衣
の惣名也河親行云為薫
物これハ源氏物語ノりハ
くのえかうとのみやりのく
衣為雑雑説全分不
覚悟云薫衣香ハ黒方
此一名とも云り又ハ薫物
の惣名也云々各別の方是
詮[スル]梅枝巻
細　ありめはらく
とてるらく　師　侍従ハめ
のとれよろれバ末摘より
ちかふれてあへきとハ
とひともらうぶらうしとく
おかづくハ髪を褒美也
細之がかるてもらず
らたくかと云後り
[illegible]

ぬるしるしみせ給べきものなくて我御ぐしのおち
たりけるをとりあつめてかづらにし給
へるが九尺よばかりにていときよらなる
をゝかしげなるはこにいれてむかしのく
のえかうのいとかうばしき一つぼぐし
てたまふ
たゆまじきすぢをたのみし玉かづら
思のほかにかけはなれぬることまゝのゝたまひ
をきしこともありしかばかひなき身なり
ともみはてむとこそおもひつれうちすて
らるゝもことわりなれど誰にみゆづり
てかとうらめしうなんとていみじうなき

（末摘の髪也　薫　衣香　一壺　具　末摘哥　くぐいともいふ　河　母の弁の事と云々又　末摘の身上としての事也）

ぬるとさよりて云ふ　[illegible]
おもくの　細　侍従が母之侍従が母をまくとるひろうかべし又ハ乳母の惣名のやうにいひ来れ
るにや　おばさまさりのくやのこをおほしとやるべきてらうらくし　師　侍従が母のおば上の事に
しおほしたりととうくちもちしも此おばも末摘をうん後そとく乳母侍従よ遠言せしもや
らうそそらうくも　末摘のさうりうきさ身をみ後うハしとりうそれどて
あくの遺言　遠言う及
わとつ後てさるすよハおく
ねどもとうく侍従の河之
よし此の　細　年月漏恩
し難きうらをもるう
来つるをとぞ又よ及後き
とあり
おくくく　細　哲云しるを
たまんハうりしとおすり
手向神ハ道祖神をなり

すゞこの人も物もきこえやらずまゝの
遺言ハさらにもきこえさせずとしごろ
の忍びがたき世のうさをすごしつ
るにかくおぼえぬみちにいざなはれて
はるかにまかりあくがるゝことゝて
玉かづらたえてもやまじゆくみちの
たむけの神もかけてちかはむいのちこそ
しり侍らねなどいふにいづらくらう
なりぬとつぶやかれて心もそらなれば

（細　侍従之　まゝが遺言　まよつきて不足なるを　侍従哥　孟　侍従母服也ともいふ　細　大弐の妻の言之　細　侍従か心之）

そゝしたりて
細 人〳〵たのむべくもなく
いひかへて 師 御返しのお
てゆくを程なりし之
見てにつけさり
とのゝ見え給ひにけ
るなし
あしのはしら山 細 彼是竹
修行もくひのおしらね 学は
ゆふかすみなどしたり 山影も
兼日 御君がゆくらしの志て
山志るらめども雪のまにまに
く跡はたづねん 雲の宿
こしの白山 おもひやるかな
の年月の雪つもりつゝ

てひさいづればくりそのこともうれしかりつゝ。さうし
ごろ見びつくもゆきちるれぞけりつくへの。
くわれぬるこそ給ひしん御返りは見を
よはれゆらぬらんおほさるいくへいつぞや
こしつらぞいかでかしらうとゝもち給へんで
れくゆえしこそ念じるまじきれどもその
見てまつけからうさらじらぐとおりぞくし御
おまじうおへる給へ人にとらくこてかはり雲
月ごろはなかあれバゆきさわくしけがらは
て明るはさもちまもあるを。網目夕見を
かへくありさじらくの涙よ。なかう門を
つまそうこの白山おひやしるく雪のくれ

への給はぬかなしきを
細 笑みをそへ 明 義曰め
つくしたるらしきこと見えて
さしあたりむかへりしき
下の御心の御よ袖さかり
の御下給。御心のうちを
さく 師 此御説ゟれは源
しきかへし源の御心の
めうしきふとのらく
としうらぬ
細 源廿八歳冬なり。みを
くしの奥く 孟 二月より
内大臣になり給ふ
卯月ばかりに花ちる里
まゆかりしそく
師 花ちるさとしはなしめ
より後の給わくと見
えたり

よりぞいろおもへざるまじて。つれ〴〵と
あすめ給ひ。いくろのをこしくを出して すぐさめお
さうを見つゝひをおもぞつゝしつゝ人々をくるまく
てしまりもちらけ御しきみえてのさらま
こうしさびしく物がなしく御ぼうさらぬ御前
めはめづらし人よいとゞりのさはげしき
れはおりさ御あそびいとやびしとたうさがさ
まぬ所にみはわざとゝもえまどぞれ給
ひすすまてそのゝ人はうさぼせうの中まかん
とどうらう花していつかかりもあれどもふ河
ねまあべきけんぐしもいそうぞあやしうる
よそしうらぬ。卯月ばかりに花ちる里を

風につきて　細 引哥に有
たらず　何人をさしけん
自る藤花風によそへて
なびくてるれ
其ことをたしかにいへる
引哥の中より藤のさ
かりなるにかほるあり
き侍り
こゝろみるべし
細 花ちる里をとぶらひて
かへさに此宮の花見
給ふとみえたり　明 花去
梅などはねじ又咲しとく
此時花散里へ思ふ人ありて
又あはれなるかなし

さし出給へるに　花 車の物
見よりさしのぞき出て御覧
せらるなり
そやうの文ならば
見し心ちする木立なれ
と思ひ出てやゝそひたち
のまへに見え侍るとも

うち見えけるをしる　細 源の用
さらくさあはれと思ふ人を
かゝるの時に御かゝるへ
よく見さだめて後源の
心に見ゆるものとてよく
ひたちの宮の御こゝろそ
そこなるをしき常にそひ
とらせてそう
みるねの夢に　細 又是のみく
まへにたゝ源氏の御事
八様に聞ゆるへし　仰 なり

給ひいでゝまして。忍びて対の上に御いとま
聞えて出給ふ。日ごろふりつるなごりの
雨いますこしそゝきて、をかしきほどに月さし
出たり。むかしの御ありきおぼしいでられて、
えんなるほどの夕月夜に、みちのほど、
よろづの事おぼしいでておはするに、
かたもなくあれたる家の、木だちしげく森のやうなるを
すぎ給ふ。大きなる松に藤のさきかゝりて
て月かげになよびたる、風につきてさとにほ
ふがなつかしく、そこはかとなきかをりなり。
たちばなにはかはりてをかしければ、さし出
給へるに、柳もいたうしだりて、ついひぢも
さはらねばみだれふしたり。見し心ちする
木だちかなとおぼすは、はやうこの宮なり
けり。いとあはれにて、おしとゞめさせ給ふ。例の
惟光はかゝる御しのびありきにおくれね
ばさぶらひけり。めしよせて、こゝはひたち
の宮ぞかしな。しかはべると聞ゆ。こゝにあり
し人はまだやながむらん。とぶらふべ
きを、わざとものせんもところせし。かゝるついで
に入りて消息せよ。よくたづねよりて
をうち出よ。人たがへしてはをこならんと
のたまふ。こゝにはいとゞながめまさるころにて、つく
づくとおはしけるに、ひるねの夢に故宮の見え

ひければさめていとなごりかなしくおぼしてもり
ぬれたるひさしのはしつかたおしのごはせて
ここかしこの御座ひきつくろはせなどしつつ
例ならず世づき給ひて
なき人をこふるたもとのひまなきにあ
れたるのきのしづくさへそふも心ぐるしき程
になんありけるこれみつ入てめぐるめぐる
人のおとするかたやとみるにいささかの人げを
せずされはこそゆききのみちにみいるれ
ど人すみげもなき物をと思ひてかへりまい
る程に月あかくさし出たるに見れば
かうし二間ばかりあげてすだれうごくけしき也

わづかに見つけたる心ちおそろしくさへおぼ
ゆれどよりてこはづくればいと物ふりたるこゑ
にてまづしはぶきをさきにたててかれはたそ
なに人ぞととふ名のりして侍従の君と
きこえし人にたいめむ給はらんと
いふそれはほかになんものし給
ふされどおぼしわくまじき女なん侍るといふ声いたうね
びすぎたれどきゝし老人とききしりたり
うちには思ひもよらずかりぎぬすがたなる男
しのびやかにもてなしなごやかなれば
みならはずなりにける目にてもしきつねな
どの変化にやとおぼゆれどちかうよりて

めれきこのごりせるみとし経
も忠学深のせうとづきはう
蓬の露もしげくし
ひさき人いと　細　ひさしの友
の方ハいかにも緒とぢさる
と此方ハさかりて雨もく
衰ろへりハ時の感より出
末ぬる気とみゆる　師古
夫を恋る袂の涙よりも
けつ軒の雫のぬきそ恋と
これらもりてめぐりく
なかくさめくりくて
惟光の末摘の住家をさ
ぐりみる

されどこそゆききの道にみ
惟光おもく此宮の家を
ゆききにひて見いれど人
おもるきさまにうに思ひ
しに今さらにもあるれば
されどこそと

月あかくさしいづる
孟　惟光がもとでよく人を
ぞうよ月影よみ付しは
末の果報く

されど思しわくまじきれ
孔これ侍従が伯母の君と云
女也　師　侍従こそ侍しね
それはれたりぬ女ぞと

りこゝね
常にもいはず狐の住かり
あつて人ゝ海みなみノの
りかもやすくらてらしなわ
いそあるみどとそり荒たる
所に住しんてあれば惟光
をうたがふて

かゝるぬけ道さへありけるハ赤猪の入さへかくれバ源のんハきんじ賊のくせをとくし
こまひもゆきさいかでまよ
細源の胴から猪ハぶちときまりとみへさまはいぐとく（師 源ハ寝ます）
ハ何とりさんとくし
さうやまくくそとしつてあいつまくよふとおもひさうやまきさしへんやをとうしいふく
なかうせのふ
細猪寝言し 盃わすらの相わんからさうバ何事ぞ浅茅が家よりぬけ出てんらし
さーつうらんへのふかまた年老たるがふみもまるよどびおどしとおふ経めかしくいふさきせをふさしておらん猪をとられバ推光むろうしろく

しかるところけゝ色かゝ巾しれかくくぬけ道猪ずしべ身ぢかゝさせまつべくこれんぎしをさしはすんかりしますかゝりしこよひをゆさすぎうてまとまつしせまへるといぐずかしきせんかろやまくとよのへば女だ打ちかひでりかしをはれきを猪ずらばうら浅茅が家をさかりの猪かずくハ何事ん（推光ま仕あつき海を推留せんとらく）やくでや身今ていかしさせまへりし年でら人のふるもさくひあしとのきめづかれぶよ我ってハきなりともふて仰れと（惟光んて）やさくづいそくどくびかうを志ち川べきがむしろ（細惟光が詞）うしそれへおしくまづくるんとかして（源んさ）せん

我わんのかまけあくま
細源の自分とせまりて面を岩よ甚生の言も宿直かりくそうくれきうしまへれこそあれしこそかうたよさんひま宿直男をせめ猪あまよ根もあらしがかう色 盃今まで何まうねと源の梅までかゝぬまで海
細常よ老人の胴よかう世猪はまさ海ずしばかうふあきうがつしとか川ろひとせらでハ術なんやの猪とうあまうゝはのまひあかしつつ盃んのかかべきんとハ去ひ

（細源の同詞）とてまうぬ。ぶみじうひしえへしかりつかうぬよ
（猪こゝを放ちめいとしてのまた）ぞ芳の猿色とし ぬよりぎの志げきされと
（細惟光が詞）の猪へハ思うかくさんさどかよりて怖つ猪源がむずのかねとらひ御しかい今づんかでぬ声かく仰りつらし志猪せかゐつかじう（源氏んて）表よかうさげきるかまふくらちてたぐしくらん今まくといざかけつうし我わんの（猪が）信あさも光てあらしかいかしきべきかうち志の（細源の惟光への詞）びあり事まくかくでせくかうつゝかくでいえそうかふずからね あやうくへげことそいあつめとそとろうして今海よ（赤猪の本性）（とのまて）ありらはの猪ひあがらふとい猪んへつと

あかねどもゆひてのまづきハ
めでたく
ゆへあるけしきして　細　奇
かゞざえゝも入て遊ける
ごと〳〵てよそのかの心あるの
らバ入给べきを未勝の心
の方なくどをさるをとして
うらのふまつくつぎもおなさく
御えんをくぎるやうな
までしくの御一切人の
用心などうべし也として
すゞしても　細　此二句妙也
余るそかもくうつまふかす
もおくハもくべきの色き
とく物がら給面白し
師　惟光がえわけも给
まじれ家あさみてとやう
どがけてお ても我そそと
ましまくらつ
抄　惟光ハさて
にるとまへうしくおと此細ふ
てみゝらつ
河まうの家ど　細　惟光打て
御かゞしつなりありの様く

秋つかたしうけほさらゆへありけれきこうそこ
もいとこゝよくまめしけれどもまいてひしらど
のこゝをそさまもちぎりうしたハ世づつひ
のさうらぶらうんもいとおしう世けしとど
めでたし惟光をぶらしまえわけさを給ふ程
よきさの家けさよるん給つかなへうしつゝ
ちをてなんいつをまへからいと白れぞ
源氏　家知ひてもまねしてもさめうらはすくなう
さまりざのかしけるろそひろりごちうく
車にて　なぞどろまへんけさゝの露を馬のむら
惟光がつきて　してつゝひつていれとそまつ家おはすぞく
こゝもむつ林のちぐれめきそしらえけハ

河不用之　師　弘安源氏論義ニ梁元帝の纂要ニ仏庭の名あるのむらしてといへり　梁元帝ハ帝王略論ニ梁孝元皇帝ニ庭草無人跡又金樓子散志遠略記などあり
かつかやくさくけ海ハ
かつそれども　細　唯不用之
河いこつかなら
明　只今の宮けさハげよ文
此野の庭の木ふ家とふく
やうなんさもぶみてて
みかくしの白き此里字本
の方の家ハ哀ふまれの
いさまつけてもいひ
ところと
細　紅葉ニ面白きのもち
よしく　師　能ちあるを
きかれさる命く

河見どころもなし
みるこゝろもふげよこのもとつかさはまさ
惟光朝臣　源の宰相　つくしくさ白御そしめさのすそハいと
ほのかなめつとひしぎよおかさきれ
ざうし　思し中にあぞましてさりすくなうて
いかさまふなつけてとひらしとくなると
細　今けの宮さまの　一盃主の源ハ光て思ひと連て思ひく
こらまじつきうへあさこぞらやをうわ
ほ惟光いさりくとしまちろしはすへ家
おとこくられしられどいとくぐへ流
しきめん　あり海して對面をんもいとつまし、
世すうつ大貳の御乃有けなりとこそ候ぞ

うつろゆかずかりけれ
細 大弐の少弐のなりし
ゆかりむかしすかりを
おもう
いくさき
細 香のはしるのつま入さ
ろおもかりうけるよさしえ
のもとけるえんなし
細 薫の大弐の事よ世
まへ川の九丁し

こしも此ころいうてね
孟 そうたいらかとも
きもわかしくえまん
いらへもそてもし
をぶろくねそびらの
細 わらうれの事とぞう。
牧いなかえうれくれば
とりて源氏所は橘の
上宰 えていうくひき
かせ給ふる門

どきとをもうつろゆかずにほひやかにてゆかり
まうれ給ハぞうけうなば人ぐのうくれれ（兵部卿宮の御こと）（香）
唐 うくひ川よられさらせ給ひしなろく
香 きりあそうらとをまらせれハいてはと入り（未の上の御ことなり）
さうへ給て、そのまでけさうえらさてひささよ
とそおぼすいうりあそ紫上のへさて御を（源氏の御こと）（細 紫の御こと）
んおらりハうちらくえるんやうりしほそつる
どさうもおぼろうハあくわらくしらきに
いまてでうろえくるへへつらいどすずきすきね
とうらのまうらえくすぞるんむけるさ（細 とりをまうね）
そうまげうしそくびくをそうへそや（この事は源氏の御こと）
まきれハ例のいそつるりけいとく（これハ 未の上の御こと）

ほのかなるとしそぐ給
細 御方ハうへ給へる

さうつね
細 源の御ことぞよう
らのいうしまうりる
とせ
まいくの世すきしゆかまへ
花 宰相の中将ハ
おがつうすきへとの事
なり
みんまたまふ
細 内にもまたかうり
まされとれしもふかく
まずふみとおつさくい

ともうへ申しあやしくあらそひなどのへいさん
おかおきくしぬよゆりひとつしてぞ。源の
まゝくしいで給けるくらくさゆれよ（源の御こと）
そくし給ひこ事所のあくれもとゆかす
ぞやらくこぬむすりひよ人の心て
ろのきらもうかうえんのすでふらけ
入給へて季けさなくりもうくゆかばもとをし
はのなうくくるさいくのゆは世かゆ
すゝんハいまらう始のめんよるのはさうし
んいひしよ御がなけゝと此へらきさおさ
しと出かれぬとしもすゝけくえつとさ
とす給てしとかわしあありまさつとてせ（源の御こと）

まばゆき御かたち夜ゆかれは
足わされうち夜ゆかれは
かゝり
ひとこ様し　細　ひきうへしん
むべ若まされ松のこ
ゞうく嵐よろこび式部の松
は蓉すの御しよはあかね
どおもくかりうこと驚
給く蓉すの年もつかり
さうよし　細　源氏の
君の心うつり
こちらはのさし聞書のさ
ばかりす立とまりて
君しかもきよくよく
かららの　細　まつりと
いひとろの家の御方はせ
こより上の羽林かしねまう
しの御かうとまうで
宗たよりう給ふ
細　源氏より御家のかえ
ちがのうれしかりうろを
いつか義日源氏の旅衣おう
まつりうどの驚く
源の御と引かへてらんし

給ひても、御心のうちにおもひ出でめぐりてはゆかしき所
ありしかれど、つゐにこの身をもし
てはなれ給ふまじくおぼしなぐさめて松
のこゞちよりうちよげりて月のかげもあはれなる
夜のやうなる御方のあなる御心もなし
てとまる
源氏　めでたるとめぐらし思へつゝいかにし
とぞやどのあたりやみれかのごとくぞ　源相く
年つかりかるく　つりめかんしてやこよなうちかなけんと　也狂
よの常ならぬ御心くすられよかん
源の身上のこと　いまのけしきぞひるのもうれよやりけん
世の聞こえもいとはしきをはべきと思し　上達の身上のこと

ひとつのうつれ、細　みちひきやひとつのうつれよみちろてわかれの方かへるさけりうちもんとは
孟　源の源氏の御絡みちのるすとちづりまうりうんとく
春秋のくらべにぐさき
細上陽人のくわかり源の月
給ひて蓉すうて、形を
そのかへりも世におぼしとや
打しさてのまゝに
うくしもすゞかなうもうつは
みやちりまし　師　書陽のこも
ちしうそ我いうしうす之絡
とかやしくとく
としとてく　細　前の役つかり
とひしり給さ　師　源の紙
幸ともよのまうまつりてもゞひ
ろそりしけは今は若いは花ゆ
へはうくしとく
月つり方は　細　西向き様之
孟　夕月夜さやけし

へ給へつゝん春秋のくらべにおぼしもこれ
源ふりでいてのかすく　まつはくまこ給へ人としられすくなかりける
とかいはおやみうちなるおぼしきこえしは
書寿　とゞえてかい思ひしろしめしけれど
のさうりよすずみぬかつらと思ひやりのさ
らはれさまするけしきにもそでのうちむし
ちらわびまうゝるよしみせさせ給　源のめくて
月つりてよかりてみしのつましのあはさ
さらまりきこえさせ給ふのいつやうな　かしめりくちく
のさく　給のつまものてりうけ恵みいてとくれやうくの　細そとくしえくちく
さしいうさしれがおもうくえゆうよ常まり

あのふ学よやうまするか
孟 君君ふ学よやうて右
ハ此むしの善でかし
うりのく
えのえたありけりハ 細 えの
善うらさ敵えうめの義な
ありハ又らやびまと
ゆうしや
めうしかくうにさくしらか
らいかくら 河 古人只一同顔
叔子事云々定家卿本に
ハ塔こゝかゝらさうとあり或
又堂とうるこゝうかもあ
く 毛詩云昔者顔叔
子獨處于室。隣之釐婦
又独處于室。夜暴風雨
至而室壊。婦人趨而至。顔
叔子納之而使執燭。
放乎旦而蒸盡。縮屋而
継之。自以為辟嫌之不審
矣云々。此事毛詩史記ニ
下 以為室。堂とも云へり
家通スル敷。塔ハ一向ニ仏語
め何成ハ堂着佛閣人ト

とくぬけ出たるひとの面かじしうのず覚子は 内儀の御事
やつれたるかのさかめもらいさやびらよく やすらのむく
ゆるとむしき物語よらうらへ閉らしうら人をも 河内本ト とあり 細 畢竟実語ある人の(?)也
ありけると笑ひあはれそれ方に私〳〵さ面 細 おさこ物ども皆どもして
までそしらうよせうるとあそくれなるひとく 博識く
かくよ物づくしうけくらひのふみすゞうり 細 君を面前よ深のを猿く
あそやうするを人の(?)よらくて世間されてたる
くこめてくえすれどしらがましくせしる
らしたさ海ぐの地せらひよおかれてあくて免 孟 深入へのゝ
すそつうかりつうしとせられつんとぬ
めしくせ間をよめ花うう里見めかやうう
いまめかしくいはしくやさを給そめか一あう

薩の作ゝにて非室家若今物語堂ノ字を書誤欤。魚魯のまがひ云々。奥入云
顔叔子とい人能く作りのみいづらの男のまこなひのかれて落のなとふかれて夜もすがらうまへけるあり
して居たりけり 愚案 顔叔子と女と奥入のまうけ遠のよし荒ゐるよみり。又河内本よハ
てこなかくの女もあり荒ゐる男も之 河 式部はくの中納言の猶猪とも地ありけり。法式ハ池の人の
也されハ云貧家の女 号小大輔 丁のうかびとこそあるよ めでさくらくわりあり此等にて
ハきれハ破れ家しと云 荒此る未ゝ迷るよ 顔叔子ハ男子之奥入よ女しとそれ遠きう程の
しや 呼 河海 顔叔子かうするゝ何ようさくされハいとじしれ女をとそう。常陸の宮のてるよ投わる
中納言の猶猪いらしう何よりさま 負心のゆるて荒ゐるよハ顔叔子ハ男之程の中納言の猶猪とあり
よこかうしまうしき女のまうしく 云くまた一些 云く畢竟 ならうなりしへのすまらくし
愚按 呼 細 孟 河 皆式部のうらなど定家のかゝと見まつり荒のみひうくよ河内本よ男
云ふり 斎流 此まる表紙と見 呼 細 子 實法なり人のまうよらしかふかくこゝらへし
ものまらかうきゝも 細 めくらくもなるく とハられもあまる 呼 花家里の家のまこともうるう
あきぬおむれで式部丞の れぬきんけしこよなかりしかどう
のおれさらも同じうとの 細 式部丞の弟蔵人 少将之四月元朝也 られはまうしまうかげいすゞの程いのそさ
いうすしぬとく たゞことゝつけて人のなすまゝ物がたりに
さびぞきさりけんとくん 世おりかたまさるらうけんらくしく式部丞 細 下部丞
源の語りけれまえ みもこのえみはこまやかにきよわかしう 細の家来云ふ作らし
くらまつうまうし 博のゝ てじつらめしき人の便をさくしまかひまうし

いとうき 細 猶次第するな
ゐくし 師とも云々
ひさかたに院くやかて二条
院の御へかへりて まへん
のなりてせん人々
かひとふかなふべし
かうまつる 細 いまそで為
給つゝ猶高給ふの面目
ならさうしく 盃 末摘を為
東まふとくわて四世以八
西円と云れハこの御八出
ありなとし

くわやりまうりさのと
とかれ
末摘の方のかく此源の
なりとを見せ

べくところどころつかうまつりてせめく
ひさかの父のまうらて
ての〔こ〕ぐらしきまいてさぐさう〔?〕ふ物ら
うき光つくろうを給ひちつゞいでまう
しろくつくらんよつけても銭かしちかゝ人
かうぎ
はのかくら
ほくなうれバとう給たしなし八文いく
そのかみし
こ御やうまうきまで二条院いとしちらさ二
細 二条の院之
とつくせ給をそこよりかんだちめる
べきまうりてさこうとへゆきりわてまふ
らうとまへるぞ人ゝのそへまて出かやり
つさつひはしまへゆ八へりかやちもさまに
のりしかはじさ家なさきまそ女がてもそら
はかた正よ色くし
とおんきそてなんぞあるまよひとそしらこひ

うけのけるうさひ 細 以下窮
地くぼの手せをゐぞうぶか
の人と云人 何代ゆがさぬと
し盃そとしちろさしも多
きことふやくて
しはとうしられんと
盃 六条の御息所 勝月秋多
どめやうたら世よ物し玉八
おうてハかんとくめおかぬ源
か様あつと人のさちつさう
を引ぶ人やこ此ハをも秋かふさ
今へかからとあらづりもて
前よ云とうしもさそて松り
のべさうてひとゝのつう
まつらてあらしと思つ
きくうまなさかひていさら
てめつとおり
わざんへならつさ
細 末摘の花のまぶつくろ多
るまよらしひさうへくへとど
文ま文飯ちゞのくゝてれ
なきれうらひて末摘の
まどちさひもつさく

博士けらなげの仕すをひかくも。どしまべ
よろしのつゝのくをハ光人とゞめさしてた
まうず〳〵よるものをしりられいとかくしこゝろ
よしおうしあをあをりとあ給りのと。
ぶしよ
人のあうしかくよくひきうすくあなこさと
細
老法家の殿おもしなきさをいふ
あよいめよとさわらしぬ仕わりさ油をとりのめ
盃 云云光の仕もまのつくむやり 是と芸る中蔭く
うつつと給いいとあつさけし仕んにはよりまこ二万ん。
られを芸めのちぐさりあわりりしいゆ伐かご
ほとあるつりまでて云湘ぐくまさきとひ
みてちかおれさしと云之 上 下
細 遐叔のへく
にれまさき
らうわれしこへしりのへつぐ子れもく
鴎集をかく
まつうんとあしそひいづる人もありけぞ
へかしいさむりれいくさまさぞうく以えん

極のさひやうを
細 源ハ安中に生長ニ給し
故よりかしき人の思やりな
どはおかしと河は
のつひの心をもなり
も続思知するなし 河海

本草の楽も
孟子曰人安楽花竹赤和
平とて其人の称に強て
草木の事も能うるる也

もろはありさ侍り。いやとくなすしひく。
こしなうこしなまさる侍らどもやうやうじや
うの家よ主人ハすくうびなしきすきな
ちもうりもまてゝうらつけのかとこえよ参り
くわる。ゑいつかし人のをもまうらうはいさ和
ひの病みて極のさひやうをまして(？)ひ
給よされバこ侍やうよ物がたりし(？)そてにろうに。
縁ひしくりうなし ひらくのうえ
まわひいそく。家のきらやうくへめてえ。
本草の楽もしでもごくおそれ(？)こえし
るすうれしと。やうまうささるひ前栽の
いしさらも源しうきさなし(？)て
やう見てなさしもげいしの(？)よ川

くれ人の 細 源の此段迄
おもがらうりいまいれ給
しいへかなやるうく
かくしも世ばかり
其以前よりて一歳年うへ
なべし 師 按るに此巻ハ抹堂
昇なりるべし 孟 菜の地
よ已故のよすをつかみでよ
の宜よる得也
菜め路 細 已女巻の会返よ
あるる也此巻ハひくらの
文の一翰とうなりさぎれ
形業のうりともうかう
の去(？)盛の和のうし
細 一位成年年かくの翁
かりは是も形業をも
暁年のくうりくるる
み(？)例の形業をまうる
やくし 師 此所にて二としせ
こうり形を思のるするみ
ゆ

へゆうしさはりく 源の末後なし 持らうらじめて物がたりう
るかしきありととうとて此分しき給かり
てく。川いまうしつらゆいかゝ心くとせだんう
まことのふう定まなりあまて東の(？)後とうふ
所よるん渡もはらうしなりな給へる対面し
給こしるなどはいてしりこなれどもちらさ
志あの侍どもめて。立方ふもまうてり給よ。
うしのぞきさあらし給つ。いとあかなつくい
しげなをもまてあしさうて給つてとうれた
哉の和乃方のおりて。物ぞうつきさるる侍。
仏(？)後うされしきこりのくいましがらしまいらさ
こしきりけりうしろわきてよ(？)ちうしう物な

いかほどうし
孟子より異哉アり者
畧しさつ傾く
きこゆべきしぞ
おもがいひきにきじこと
てまゐべきとぞとふ

亀ろ雅るごくとづまもらしくるくはがなうも
（細なゆく）
と海個し意れがく つしうしらいつうくうる
（おほゝやん相むうろれつどく）
さく地うくれいがまくしきとつぞくおもしん
（又）
共りよ共りへいぞくきこゆべきこし地